

令和 2 年 7 月 7 日現在

機関番号：32634

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02444

研究課題名(和文) ウェールズ英語文学の研究 二〇世紀産業小説とナショナリズム・共同体

研究課題名(英文) A Research on Welsh Writing in English: The Industrial Novel in the Twenties Century, Nationalism, and Community

研究代表者

河野 真太郎 (Kono, Shintaro)

専修大学・法学部・教授

研究者番号：30411101

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：ウェールズ英語文学という、日本では紹介も研究も進んでいない英語文学の作家・作品を研究し、紹介を進めることを目的とした本研究課題であったが、ルイス・ジョーンズ、エミール・ハンフリーズ、レイモンド・ウィリアムズ、レイチェル・トレザイスといった20世紀を通じた作家たちの作品についての研究を国の内外の学会で発表しつつ、ウェールズをはじめとする海外の研究者との交流と共同研究が大きく進展した。また、ウェールズ英語文学を国民に広く紹介するために、ウェールズ英語文学の短編翻訳集の企画と翻訳を進め、2020年7月に『暗い世界 ウェールズ短編集』(堀之内出版)として出版の予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ウェールズ英語文学はこれまでごく一部の作家を除いては日本に紹介されてこなかった。しかし、ウェールズのイギリスの歴史と文化における意味と役割を考えると、これはバランスを失った状況であったと言ってよい。とりわけ、ウェールズ文学を読むことは、イギリスの産業化の歴史とそれが生み出した文化を考えることにほかならない。そして同時に、近年活発なナショナリズムと産業社会との関係も重要であった。本研究は、そのような歴史的・文化的なパースペクティブに開きつつ、これまで十分に紹介されてこなかったウェールズ文学を本邦に紹介するという大きな意義を持っている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this grant has been to make researches into the field of Welsh writing in English, which has not been a substantial focus of attention, either in scholarly terms or in the terms of general readership. During the research period, I made researches into, and made presentations at international as well as domestic conferences about, writers like Lewis Jones, Emyr Humphreys, Raymond Williams, and Rachel Trezise. One of the notable results of the research is a chapter on Lewis Jones, which forms part of a historical survey of British literature, entitled *Futility and Anarchy*, published from Cambridge University Press. Another is a collection of Welsh short stories, edited by myself and translated into Japanese by a network of scholars who are also working on Welsh writing, which is going to be published under the title of *The Dark World* in July 2020.

研究分野：イギリス文学・文化

キーワード：イギリス文学 ウェールズ文学 ウェールズ英語文学 産業文学 ナショナリズム

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

イギリス、とりわけウェールズにおいては、ウェールズ英語文学はジャンルおよび研究分野として確立されている。たとえばウェールズ英語文学を専門とする学部・学科が多く大学の設置され、「ウェールズ文庫(The Library of Wales)」と題された英語で書かれた文学作品のシリーズが出版されるなどといった状況である。このようなイギリスにおける研究の状況と比較した際に、日本でウェールズ英語文学の研究は、あまりにも遅れていると言わざるを得なかった。Dylan Thomas や R. S. Thomas などの作家については、翻訳による紹介や研究がこれまでも行われていたものの、いずれもウェールズ作家というよりはイギリス作家として扱われてきたものである。

研究代表者は、ウェールズ出身の批評家・作家の Raymond Williams の著作とその研究を通じて、ウェールズ英語文学の、いまだ開拓されていない広大な領域の存在に気づいた。Williams もまた、通常はウェールズ作家というよりはカルチュラル・スタディーズを創始したイギリスの文化批評家として扱われている。しかし、Williams の思想と作品の背後には、彼のウェールズという出自とそこからの移動の経験が不可欠の要素として存在していた。

Williams 研究を出発点として、研究代表者は Williams をその一部とするウェールズ英語文学の全般的な研究を計画するにいたった。『愛と戦いのイギリス文化史 1951年-2010年』(慶應義塾大学出版会)においては、ウェールズを主題とする章を担当し、ウェールズ文化を研究する際の基本的な問題設定を提示した。そこで明らかになったのは、ウェールズ英語文学においては文化的なナショナリズムだけではなく、産業労働者コミュニティを背景とする文学の伝統が重要であったということであった。研究代表者はウェールズ英語文学研究を開始するために、科学研究費(若手(B))「ウェールズ英語文学研究の基盤創設に向けて 二十世紀小説を中心に」平成23年度~26年度)を取得し、その基礎研究に乗り出した。この科学研究費による研究では、Raymond Williams 研究を継続する一方で、Emyr Humphreys, Lewis Jones, Rhys Davies, Gwyn Jones, Richard Llewellyn, Geraint Goowin, Saunders Lewis といった個別の作家についての基礎研究が進められた。

## 2. 研究の目的

本研究は、先述の基礎研究を土台に、それをさらに発展させ、研究対象も広げていくことを目的とした。具体的には、これまでは Raymond Williams と Emyr Humphreys を除いては 1930年代を中心とする研究を行ってきたが、より広く戦間期、さらには戦後から現代までを対象として視野の広い研究を行う。主題的には、先述のナショナリズムと産業労働者共同体の文化という、場合によっては矛盾し対立する要素のあいだの関係をいかにして説明し、そのあいだに矛盾があるならばそれがいかにして解決しうるのかを、これまでの研究を土台として発展的に考察していった。主題別に研究テーマをまとめると下記のように分類できる。

### (1) Raymond Williams 研究

1988年に死去した Williams は、晩年にウェールズ・ナショナリズムに「回帰」したと言われる。だがこれは、晩節における単なる回帰としてはみなせない。1980年代には、Benedict Anderson の *Imagined Communities* や、Eric Hobsbawm らの *The Invention of Tradition* など、新たなナショナリズム論が活況を呈していた。これらのナショナリズム論は、「非本質主義的ナショナリズム論」とまとめることができる。だが、上記の二冊の本が出版された1983年に、Williams は *Towards 2000* を出版し、そこで上記のナショナリズム論に逆らうような形で、ラディカルな政治とナショナリズムとの結びつきの可能性を論じた。本研究では Williams によるネーション論と、さらには Williams の小説作品を精査し、それがいかなる可能性を持っているのかを研究した。

### (2) 戦間期ウェールズ英語文学研究

上記の Williams は、簡潔に言えば社会主義とナショナリズムとの対立の乗り越えを企図したと言える。この対立の起源は、19世紀後半までさかのぼることができる(Kenneth O. Morgan, *Rebirth of a Nation*) が、本研究ではもうひとつの重要な時期である大戦間期に注目する。大戦間期はウェールズ国民党が成立し、ウェールズ語を基盤とするナショナリズムが起きた時代であると同時に、1926年のジェネラル・ストライキに象徴されるような、南ウェールズ炭鉱地帯における産業労働者共同体が力をつけていった時代でもある。戦間期は文化ナショナリズムと社会主義との分離と対立の分水嶺であるといえるこれについては Lewis Jones や Gwyn Jones, Richard Llewellyn といった1930年代の作家に注目した。

### (3) 戦後ウェールズ英語文学研究

日本における研究にでも、また研究代表者の研究においても未開拓の分野が、第二次世界大戦後のウェールズ英語文学であった。本研究で焦点を当てたのは特に1950年代と1980年代である。前者は労働者階級共同体が資本主義への取り込みによって以前のような力を失い始める時代であり、後者はサッチャーによる新自由主義政策と、1984・5年のストライキ(の敗北)によって炭鉱労働者階級が決定的な打撃をこうむる時代であると同時に先述のように新たなナショナリズムの実践と理論が台頭した時代でもある。この新たなナショナリズムは、現代においてはウェールズだけではなくスコットランドなどの独立に向けた動きの前史をなしている。こうした時代の情勢に対応して、いかなる文学が生まれ出されたのかをあきらかにすることをめざした。

#### (4) 「20世紀産業小説」という枠組み

通例、産業小説と言えば19世紀のリアリズム小説であり、従来の文学史においては19世紀的リアリズムは20世紀のモダニズムによって超克されたとされる。本研究ではそれに対し、20世紀ウェールズ英語文学においては、モダニズムとの交渉がありつつも独自の産業小説の伝統が途切れることなく続いてきたことを強調した。それによって、19世紀から20世紀の英文学史への重要な修正が行われることになるだろう。

#### 3. 研究の方法

本研究は資料の収集と読解、ウェールズにおける学問的交流に基づいた情報収集、ウェールズおよび日本における研究成果の発表とそれに対するフィードバック、論文および翻訳紹介の形で研究成果の発表、に大別できる。研究代表者は平成28年度8月までウェールズのスウォンジー大学に滞在し、アーカイブ調査および学術交流を行った。この滞在において得られた成果を基に、残り期間においてさらなる文献研究と研究結果の学会口頭発表、論文および翻訳という形で公表を行った。

#### 4. 研究成果

研究成果は以下の5つに大別できる。

##### (1) ウェールズ文学の基本問題の整理とその提示

ここまで述べた通り、本研究では産業文学(労働者階級の形成と社会主義)とナショナリズムの観点からウェールズ文学を研究していった。そのような基本的で総論的な認識は、2018年5月、日本英文学会シンポジウムでの研究発表「英語ウェールズ文学の起源 ナショナリズムと社会主義、そしてリベラリズム」にまとめて発表した。そこでは、イギリスのEU離脱(通称Brexit)をめぐる分断と、それを表現する文学(Rachel Trezise)から出発して、20世紀ウェールズ英語文学の系譜を論じた。そこでは、Lewis Jones、Richard Llewellynといった30年代作家も扱った。(詳しくは下の(2)を参照。)

##### (2) 1930年代ウェールズ文学研究

ウェールズ英語文学が最初に質量ともに大きな進展を見たのは、1930年代であった。この時代は、大恐慌による大失業時代であり、炭鉱業を中心としたウェールズ社会も大きな動揺を経験した時代であった。それと同時に、イギリス全体を見ると、この時代はモダニズム文学が一段落し、オーデン世代やプロレタリア文学、ルポルターージュ文学が隆盛を見た時代であった。これらの要素が重なって、1930年代には炭鉱での経験を中心とする産業小説が多く書かれることになる。本研究で特に注目したのは、自身も炭鉱労働者であり、炭鉱労働者コミュニティのほぼ二世代にまたがる経験を『クマーディ』(1937年)『私たちは生きる』(1939年)の二冊の小説で描いた、Lewis Jonesであった。研究代表者はウェールズのスウォンジー大学炭鉱労働者図書館で、Lewis Jonesのアーカイブを精査し、それを基に論文を執筆した。その最終的な形は、Charles Ferrall and Dougal McNeill eds. *Futility and Anarchy: British Literature in Transition 1920-1940* (Cambridge University Press)の一章としてまとめられた。

##### (3) Raymond Williams と戦後イギリス/ウェールズ社会

本研究課題にとって、ウェールズ出身の批評家・小説家のRaymond Williamsは中心的な重要性を持っている。とりわけWilliamsの小説においては、彼のウェールズのツールと経験が非常に重要である。

Williamsの著作と小説については継続的な研究を続けてきたが、本研究期間においては、小説の*Loyalties*の研究を進めた。この小説は、ウェールズの労働者階級出身人物と、ケンブリッジの左派知識人を軸にしたものであるが、私はこれを1930年代以降の人民戦線(ポピュラー・フロント)的な集団性の形成をめぐる小説として読解した。そこにはコミュニティやより大きな政治的集団性だけでなく、「拡張する家族」という集合性のあり方が描かれており、後者は労働者階級に独特のものである。Williamsはウェールズ労働者階級の残滓的な集団性の可能性をこの小説で検討した。

この研究は2016年4月、ウェールズで行われたThe Annual Conference of the Association for Welsh Writing in English、そしてニュージーランドのヴィクトリア大学ウェリントン校で行われたSelective Tradition in the Pacific: A Conference on Class, Writing, and Cultureにおいて、かなり違う形でそれぞれ発表した。

##### (4) エコロジー思想の国際的比較

これはWilliamsのウェールズ性に明確に直結するわけではないが、後期Williamsの環境問題への感心は、彼の社会主義思想と後年におけるウェールズ・ナショナリズムへの感心と不可分である。研究代表者は、後期Williamsの社会主義的エコロジーへの感心と、カール・マルクスに見いださるエコロジー思想、そして日本のアニメ監督宮崎駿の作品に見いだされるエコロジー思想に類縁性を見だし、2019年4月に英マンチェスターで行われたThe First Annual Conference of the Raymond Williams Societyにおいてその研究成果を発表した。

#### (5) ウェールズ英語文学の翻訳・紹介

文学研究は、対象となる作家・作品を深く論じることが必要であるが、社会への研究成果の還元という意味では、作品を翻訳して紹介することも重要である。とりわけ本研究課題が対象とするウェールズ英語文学は、日本の読者層への紹介がほとんど進んでいないため、本研究課題では作品の翻訳紹介もその目的のひとつとした。

その結果、研究代表者を編訳者とし、本研究課題の研究を通じて出来上がった研究者ネットワークの中から関連分野の研究者を集めて、『暗い世界 ウェールズ短編集』を2020年7月に上梓する予定である。収録されるのは Rhys Davies, Gwyn Thomas, Margiad Evans, Ron Berry, Rachel Trezise と、1940年代から2010年代にまでわたるウェールズ英語文学の作家たちである。この翻訳集は、作品の舞台となる年代として1920年代または30年代から2010年代までをカバーしており、炭鉱業を背景とする産業文学が興った時代から、1980年代から現代までの炭鉱が廃れ、産業を失ったポスト産業状況までを通覧できるものになっており、本研究課題のひとつの総括と言って遜色のないものになっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 河野真太郎
2. 発表標題 英語ウェールズ文学の起源 ナショナリズムと社会主義、そしてリベラリズム
3. 学会等名 日本英文学会第90回大会シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shintaro Kono
2. 発表標題 Culture, Nature, and Livelihood: Raymond Williams with Hayao Miyazaki
3. 学会等名 The First Annual Conference of the Raymond Williams Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shintaro Kono
2. 発表標題 'Network of Guilt by Association': Loyalties and Cold War Liberalism
3. 学会等名 Selective Tradition in the Pacific: A Conference on Class, Writing, and Culture (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Shintaro Kono
2. 発表標題 Spies and Friends: Loyalties and Cold War Liberalism
3. 学会等名 The Annual Conference of the Association for Welsh Writing in English (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Shintaro Kono
2. 発表標題 Culture, Nature, and Livelihood: Raymond Williams with Hayao Miyazaki
3. 学会等名 The First Annual Conference of the Raymond Williams Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Charles Ferrall and Dougal McNeill	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Cambridge University Press	5. 総ページ数 384
3. 書名 Futility and Anarcy: British Literature in Transition 1920-1940	

1. 著者名 河野 真太郎、リース・デイヴィス、グウィン・トマス、マージアド・エヴァンズ、ロン・ベリー、レイ チェル・トレザイス、川端 康雄、山田 雄三、中井 亜佐子、西 亮太	4. 発行年 2020年
2. 出版社 堀之内出版	5. 総ページ数 200
3. 書名 暗い世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

After Coal <a href="https://aftercoal.jp.wordpress.com/2018/01/15/after-coal/">https://aftercoal.jp.wordpress.com/2018/01/15/after-coal/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----